



2歳児クラス | とうきょうすくわくプログラム 実施レポート (全3回)

第3回

見える世界が、ぐっと広がる。

図鑑や映像、顕微鏡を通して、生き物や自然をさまざまな角度から見つめました。写真では分からなかった動きや細かな形に気づき、自分の言葉で表現する姿が増えていきました。観察は、より深い探究へとつながっています。

活動のために準備した素材や道具、環境の設定
マット、1人用テーブル、プロジェクター、スクリーン
顕微鏡、見守りカメラの映像

探究活動の実践

- ・子どもが主体的に図鑑や生き物の観察に向き合える環境構成として、保育室内に1人用テーブルを3台設置し、活動の場が明確になるようにマットを敷いた。サイエンスルームと名付け、子どもたちが自由に生き物について研究できる空間を用意した。
- ・サイエンスルームに置いてある図鑑の付属DVDを子どもが発見し「みたい」との発信があったため、プロジェクターを使用して大画面で視聴する機会を設けた。普段は写真で見ている生き物を、映像として体の動きや表情まで見る事ができた。また、見守りカメラで記録した夜の野菜の映像をスクリーンに投影し、観察をした。



活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり

- ・図鑑を1人でじっくりと眺めることができ「これは、カブトムシの赤ちゃんだよ」「たくさんの蝶々がいるんだね」などの発見があった。
- ・カメレオンが舌を伸ばして虫を捕まえる映像を見て、「びろーんって長いね」「はやい！」など、具体的な動きに着目する姿が見られた。写真では分かりにくい動きや特徴に気づき、生き物の特徴をより深く理解しようとする姿があった。
- ・大画面で映し出された迫力ある映像に対し、「こわいね」「からだがぶつぶつしてる」「歯がいっぱいあるよ」など、さまざまな感想が聞かれた。視覚的な刺激が強まることで、細部まで観察し、自分なりの言葉で表現する姿が広がっていった。また夜の野菜の映像に「キャベツさんも寝てるね」「さむいかな」と思いを馳せる様子が見られた。
- ・顕微鏡で葉脈を見ると「道みたい」と呟いている子どもがいた。



見えた形を身近なもの結びつけて表現する姿が見られた。

- ・土を観察し「キラキラしてる」「石がいっぱいある」と気づいた。一つのかたまりに見えていた土の中にも、いろいろなものがあることに目を向けていた。

振り返りによって得た先生の気づき

- ・個別に集中できる空間を設けることで、周囲の刺激に左右されず、1人でじっくりと図鑑を手に取り、観察や探索を深める姿が見られるようになった。
- ・写真でしか見られなかった生き物の姿が、映像によって動きが視覚的に伝わることで、子どもの理解や興味がより具体的になることを実感した。静止画では気づけなかった特徴や仕組みに目が向き、探究の視点が広がっていた。
- ・子どもが自ら「見たい」と発信したことをきっかけに環境を広げたことで、主体的な学びが深まることを改めて感じた。保育者があらかじめ準備するだけでなく、子どもの気づきや発見を出発点にすることの大切さを再確認した。
- ・大画面での視聴は友達と感じたことを共有し合う機会となり、自然や生き物への関心が集団の中で広がっていく様子が見られた。
- ・子どもたちは見えたものから、それぞれにイメージを膨らませながら観察していることが分かった。葉脈を「道」と表現するなど、身近なものに結びつけて理解しようとしていた。
- ・園で育てている野菜を観察対象にしたことで、興味や関心が高まり、主体的に参加する姿が増えた。